水滸傳の文學性への一考察

――登場人物の階層性と現實性――

阿部兼也

一

水滸傳における招安以後の部分を、どのような性格のものとして理解すべきかという問題は、今日いまだ定論を見ない。その前半部は多くの落草譚が積みあげられ、人も知る「逼上梁山」の主題が展開されていくが、それは民衆と官權との個別的斷片的な對立關係が集團的組織的反抗の鬪爭へと發展成長していく過程でもあった。そのかぎりでは、民衆の持つ官權への反感のようなものが、この作品を形成したという見方は、妥當なものといえる。しかし後半部では、かの正義の實現者たる反亂部隊の英雄達が、いつの間にか招安を受け、姦臣どもに振り回されつつ酷使され、ついには首領が毒殺されるという內容であった。[1] それはまぎれもない惡の勝利と見えて、民衆の官權への反感を反映した內容としては、はなはだ相應しくないように思われる。ちなみに明末淸初の金聖歎は、賊の招安を不當とする考えに基いて、後半部を抹殺したが、そのことは、この作品のもつ方向轉換が、近代の研究者がそれを民衆との關係の中で考察の對象とするはるか以前からして、既に讀書人によって問題視されていたことを示している。金聖歎は、表向きは儒敎倫理に則ったが、その改作がどれだけ敎化の實をあげる所以となり得ていたか。彼は人物評價などでは、忠義者の宋江を徹底的に惡罵し、逆に李逵・魯智深といった粗野な無法者を高く評價しているのだから、その延長上に醇風良俗の唱導がそのままあると考えていたとは思われない。しかも他方では、招安歸順から壞滅へというそのままの內容でも、風敎の觀點からするならば、それ程の不滿があるとも思われない。その本意とするところは、彼の文學に對する見識ともかかわって、なおはかりかねる要素を殘していた。[2]

この物語の相矛盾する方向への大轉換は、作品の中でもそれなりの理由がなければならなかった。物語はそれを有名な「九天玄女」との出合いの中に設定したが、そのただ一度の出合いが、何ほどの意味を實質的に果し得ているか。それ以後の宋江が「忠義双全」の趣旨をよく體して行動するのは、むしろ自主性のある信念に基づくように見える。だから玄女との出合いは、どう見ても單なる契機でしかなく、その轉換の所以は、もっと根深い所にあると思われるのであった。したがって後半部の內容をどう理解すべきかは、金聖歎の改作した意圖を解明する問題ともかかわって、水滸傳における傳統的な課題ともなっていた。

こうしてみると、水滸傳の、なかでもその後半部が、當時のどのよ

うな現實を反映し、どのような眞實を盛り込み得ているのかについて、さらに正確に把握することこそ、いまきわめて重要な問題となっていることがわかる。そしてそれと密接にかかわって、當時における招安とは、水滸に描かれるような農民叛亂軍、いわゆる起義集團にとって、どのようなものだったのか、あるいはまた、それと水滸における歸順への經過がどうかかわっているのかなどの諸點を、解明することの重要性もまたここにある。

そうした意味で、本誌の第二十一・二十二集に掲載された中鉢雅量氏の二つの論考「水滸傳の對異民族意識について――水滸起義の性格についての一試論――」・「水滸傳の後伴部について――その歴史性と文學性――」は、以上のような諸課題を、正面からとりあげたものであり、その點劃期的な性格を持ち得ている。なかでも現實の具體的事例をふまえつつ、作品における招安のあり方が分析され、一定の成果を見せているのは、注目すべきものであろう。いまその內容をあらためて紹介する暇をもたないが、氏が農民起義における招安のあり方を考察し、それと水滸の招安との類似性・關連性を解明しようとしたのに對し、小論は忠義軍における「忠君」のあり方を、民衆の側から把握しなおして、それとの關連で、當時における招安の性格を、もう一度考え直して見たいと思う。私は氏の觀點に基本的に贊成であるが、多少の補足をかねて、もう少し掘り下げた考察を試みるつもりである。また中國の研究では、この點を當時の民衆のもっていた、異民族侵略者に抵抗したいという、民族意識の觀點から理解すべきだという見解が多いが[8]、それに對してもあわせていささかの補正となり得ればと思う。

註(1)　「大宋宣和遺事」亨集に記載された說話では、最終段は次のごとし。

……朝廷無其奈何、只得出榜招諭宋江等。有那元帥姓張名叔夜的、是世代將門之子、前來招誘宋江和那三十六人歸順宋朝、各受武功大夫誥勑、分注諸路巡檢使去也。因此三路之寇、悉得平定。後遣宋江收方臘有功、封節度使。

この今本（百回、乃至百二十回文繁本）の終幕との故事內容の相違の水滸の歴史における意味あいは、後註(2)の小川氏が「三國演義」の張飛の形象をめぐって指摘された儒教化・合理化と一致する性格のものと思われる（「『三國演義』の發展のあと」）。その所以をのべるには、特に水滸の側の掘り下げを行なわなければならない。小論全體が、おのずとある程度の解明にもなっていると思うが、論及し得なかった點も含めて、示唆のみ試みるならば、當時は實際に遺事に描かれるような經過をたどる起義集團も存在しており（たとえば曹成である。「建炎以來繫年要錄」卷六十四、紹興三年四月癸丑の條と、卷六十五、同年五月己卯などを見るに、彼は前年の六月に岳飛に平定され、ほどなく招安された人物だったが、武德大夫榮州團練使から忠州防禦使に昇進し、さらに後に兩浙東路兵馬鈐轄紹興府駐箚となっている。最後がどうなのかはまだ調べがつかぬが、なかなかの重用ぶりと見える。また岳飛のもとでは、それ程珍しくもあるまい。）、恐らくは明代でも、そのような團圓の作品として完成せしめることも、そのかぎりでは不可能ではなかったろう。しかし儒教的合理化の傾向と、高度のリアリズムとが相乘的に作用して、今本のような作品になったものと考えられる。その相乘作用を、當時にあって別個にきり離せと要求するのは、一般的に可能だったのか？

またその變質の範圍や水滸における他のあらわれ方との關連については、拙稿「明代長編小說への視點に關する二・三の問題――小川環樹著『中國小說史の研究』を讀んで――」（集刊東洋學第二十二號、一九六九年十一月、東北大學中國文史哲研究會）を參照されたい。但し變質の範圍に限定をつけるべきことについては、小川氏自身が、つとに推測さ

れていたことに、最近氣がついたので、ここに追記しておく。後註(2)の著書、P22、註(16)を參照されたい。氏の推測は前記の拙稿に檢證してある。

(2) 小川環樹氏「水滸傳の作者について」の第五節を參照されたい。（同氏著「中國小說史の研究」所收。昭和四十三年十一月、岩波書店）

(3) 中國におけるこの問題をも含んだ論爭の經過については、拙稿「北宋末北方中國の民衆における忠君意識(上)——水滸傳後半部の理解とかかわって——」（東北大學教養部紀要、第十四號。昭和四十六年三月）の第一・二節に、やや立ち入った紹介を試みたので參照されたい。とりあえず參照さるべき論文名のみ掲げれば、以下のごとし。

(1)馮雪峰「回答關於『水滸』的几个問題」（「文芝報」一九五五年第三・五・六・九・十一期）。(2)劉中「談水滸中的几个問題」（「水滸研究論文集」所收。北京、作家出版社、一九五七年）。(3)李騫「讀、談『水滸』中的几个問題」（同前）。(4)李希凡「『水滸』的現實主義」（「明清小說研究論文集」所收。北京、人民文學出版社、一九五七年）。(5)嚴敦易著「水滸傳的演變」（北京、作家出版社、一九五七年）など。

二

まず初めに、北宋末北方中國の民衆の、忠君・愛國の意識の實態がどのようなものであったかを把握しなければならない。それは當時の招安のもつ性格を解明する上で、重要な關鍵をなしていると思われるからである。中鉢氏の第一論文では、楊么・鍾相の起義などを例として、その種の意識が稀薄であるとし、したがって後の忠義軍などとは違うことを述べている。また第二の論文でも馬擴の率いる忠義軍と農民起義とは、その點區別さるべきことを論じている。私の考えでは、忠君・愛國の規準で忠義軍をはかるのは、一面的であり危險であると思う。むしろ農民起義も忠義軍も、その實態は基本的に共通な要素を持っていたといえそうである。

當時の北方中國の情況は、まことに深刻な騷亂が相繼いでいた。こういう際に民衆のとった行動は、まず避難することであった。戰亂が續くと城市など消費的性格の濃い地域は、生活の場としての意味を失なっていくから、彼等は流民化していく。そして生活するために互いに寄りそって、山砦に籠るなどして、掠奪をしなければならぬわけで、そこにいわば自然發生的に彼等が組織され指導者を推戴し武裝もしなければならぬ所以があったと思われるのである。實際にもこうした經過を、當時の北方の地に見出すことは、それ程困難ではないのであって、たとえば靖康元年（A・D・一一二六）の十月頃の平陽（今日の臨汾）などでは、日を經るに從って城内の壯丁が少くなり、當然のことながら間もなく金軍に占領されたのであった。[4] 金軍の進擊は怒濤のごとく、その比類なき兇暴性は恐るべきものであったが、その占領地域が擴大するにつれて、山砦に籠った民衆は、たとい不本意にもしろ金兵との接觸を避けきれるものではなかったろう。朝廷はそうした民衆の生活の原理に裏づけられた動きを貴重なものとし、義軍の名を冠して奬勵したのであった。かの混亂にあけくれる北宋朝廷に、さらに金兵打倒の旗幟を掲げ、みずからの威令のもとに義軍を組織し得る力量はなかった。[5] 河北の相州（今日の河南の安陽）では、宗族の康王が、朝廷の方針をよく體して、近邊の群盜や豪族の組織した私兵自衛軍をそっくり招募して、朝廷の軍にしたが、いざ出陣の際には、一兵も來なかったのみならず、金兵が來ると豪族連中は早速に降服し僞官になったという例もあった。[6] 欽宗は康王がよく努めて朝廷の方針を實踐したとし、その種の義軍を招募し得たことを多として、親筆の詔書によっ

て、河北兵馬大元帥に任じたりしているのであるが、[7]その認識の淺薄さはむしろ滑稽ですらある。騷亂の渦に投げ込まれた民衆の、當時における必然的な動向を、統治者がほとんど察知し得ないところに、彼等のいう「義軍」という幻影が成立していたのである。

こうした經緯を見るに、流民化した民衆は、あるいは豪族の私兵になり、あるいは賊衆になるなどして、生きのびていったものと思われるが、それはそのまま忠義軍の先蹤とも見えて、[8]普遍的に存在していたのである。その可能性が現實のものとなり、彼等がついに忠義軍になるのも、やはりそうした民衆の生活追求の原理との關連を無視すべきではない。彼等にとって糧秣の入手こそ至上命令であったが、朝廷の招募を受けいれて忠義軍となる所以もそこにあったのである。その間の事情は、前註の書に、義軍の兵員數を大幅に詐稱して給付を受け、露顯して處罰されるという記載が散見することからも知られる。[9]

いわゆる忠義軍の發生の經緯は、およそ以上のようなものであった。その基本的な動因は、民衆の生命を守り生活を追求する原理だったのであって、決して中華意識や、忠君の念に突き動かされたのではない。天平山の賊のごとく、漢人同志で戰かったり、三豪族のごとく、言語道斷な不忠を平然と働いたりしているのである。流民化した人びとの落ちいく先が多樣であることからしても、彼等にはもともと官・賊・私を選ぶ餘裕はなかったし、本來なら金の支配下にも入り得た。宋金交渉のもつれから、主として宋側の背信から、金兵が極端に兇暴化していたので、金の支配下で生活できなくなり、金を選ぶことができなかったということにしかすぎない。[10]したがって、官か、賊か、私かと考えて方向を決めたのでは、なおかつないのであって、この頭目のもとについて行けば、少くともこれまでの程度の生活は確保できるだろうとか、他所へ移った方が、支給物資が豐かなようだなどと考えていたものと思われるのである。[11]いささか現世的・近視眼的と評することもできるかもしれないが、まさに民衆の原理であった。

ところでこれまでの所論によって、私は當時の民衆にその種の中華・民族意識の稀薄なことを、あまりにも强調しすぎて、そのため全く存在しなかったと主張するごとき印象を與えたかもしれない。しかしそれはもとより私の本意ではないのであって、要はその種の民衆の原理が、直接的かつ主要な動因だったのであって、中華・忠君意識はより潛在的かつ從屬的な要素であったことをいうにある。たとえば方臘のごときも、起義を呼びかけるにあたっては、金軍の擡頭以前の時期でありながら、時の宋朝廷の賦役や徵發が、あまりに過酷であることとあわせて、自分達の膏血が、西北二虜（したがって西夏と遼）への歲幣に充られていることにふれている（方勺「清溪寇軌」）し、まして後の忠義軍にあっては、人びとが追いつめ追いつめられて、結果として當面の敵が金軍ばかりという情況なのだから、そうした風潮が特に高まって、その種の訴えが民衆を動かしやすかったことは、これまた想像に難くないのである。しかしその主と從との關係は、特に下層の民衆にあっては堅固なものがあり、それが逆轉するのは、上層の官僚の、それも一部の忠臣に於てのみだった。[12]たとい意識で逆轉していても、當面の行動が、民衆の原理と矛盾しなければ、何の妨げもないが、その原理を現實に蹂躙しようとすれば、宗族の康王といえども失敗するのであって、主旨はまことによく貫徹していたのである。

忠義軍における民衆の中華意識・民族意識・忠君意識の實態は、以上のごときものであり、それは潛在的にあり、從屬的に機能していた。支配者達は、その潛在的で附隨的な面にのみ眼を向けて、彼等に

忠義の名を冠せしめたのである。そもそも忠義軍のなかにも、階層的區分による意識や行動様式の相違は、當然あるのであって、その點の分析を抜きにして、彼等の結果としての抗金の行動を、忠君・民族意識の規矩でのみはかるのは、誤った結論に通じやすい。

さて以上に論考したところは、農民起義にもほぼそのままあてはまる視點なのであって、忠義軍の發生する直前の北方中國の民衆に見られた生活追求の原理は、農民起義集團の中にも存在していたし、階層的區分による意識や行動様式の相違も、當然存在していたと思われるのである。いま關連する分野の研究成果を、その視點から通覽すれば、多くの示唆に富んでいることがわかる。かつて中國の歴史學研究者達が「農民起义」「農民政权」「皇权主义」などをめぐって論爭を展開したことがあったが、その中で比較的遲い時期に、したがって討論がかなり深まった段階で發表された論文の中に、まさにその點に關する言及を含むものがある。[13] いまそれらをふまえて、結論だけを述べておく。解放以前の農民は、客觀的にみればいわゆる皇權主義者だったということは、多くの人びとに指摘されているが、それに對應する農民自身の意識の實態が、これまで論じてきた生活追求の原理だと思われるのである。農民起義が安定期に向い、統治機構の整備から政權の樹立へ進むとともに、封建的王朝制度に變質してしまうというのは、當時における歴史の法則でもあったが、それを農民起義集團内部の階層的區分による意識の相違という觀點からとらえるならば、領袖達はその種の權力の樹立を以て大成功と見なし、配下の下層農民は、苛斂誅求の輕減という小さな成功に、大滿足だったものと思われるのである。前註に掲げた戚氏は、李自成の亂に觸れて、

農民軍の領袖にしてみれば、自分では農民の利益をまもる（ある種の）政權を樹立したと思っていたのに、實際には封建政權への道を歩むことになっていたという點が悲劇的であった。農民大衆について見れば、彼等は封建地主經濟に從屬する社會的地位にあり、孤立した生活方式にあるために、自分達がうけるあらゆる苦難の根本的原因が、封建的經濟・政治制度の總體にあることを認識できないのみならず、同時に彼等が志向したところの小農經濟を基礎とした（ある種の）理想國でさえも、全くあいまいで、實現不可能なものであることを、認識できなかったのである。

（戚立煌「中國封建社會〝农民政权〟的两重性及其向封建政权轉化的必然性」）

とも述べている。そうしたことと、農民の生活追求の原理との關連を試みに考察するならば、起義の領袖は、自分が多くの農民によって支持されている所以は、彼等の原理を侵さぬのはもとよりのこと、より大幅に實現せしめ得る指導者だと認識されている點にあることを、よく承知していたであろうし、それを最も理想的に貫くことは、ほかならぬ自分自身が、最高の權力者たる天子になることであった。他方下層の農民から見れば、そのように仁君たること保證濟みの人物が、天子になって、恩德あふれる善政をしくことは、もとより歡迎すべきものとしてあったと思われるのである。それがやがて以前にもましてひどい搾取をする存在に必ずなることを、兩者は知らなかったのか、知ってはいたのか。戚氏のいう「悲劇性」は、まさにこの點にある。してみると、起義集團が權力の樹立までいかない段階であっても、その下に下層民が結集しているかぎり、集團の基本的性格は大差ないのであって、領袖は集團が存續するかぎり實力の程を判斷したりされたりしながら、早晩卽位立朔といった、封建政權への指向を、持たざるを

得ぬ性格のものだった。そしてそれが不可能な際は、招安か武力鎮壓をうけるかしないが、下層農民の生活の原理からすれば、なおかつおこぼれに與ることこそが肝要なのであって、招安歸順の方を歡迎することになるのは、みやすいところである。しかも領袖にとっても、決して單なる敗北や降服としてのみあったのではなくて、大志の中途挫折ではあっても、部分的勝利となる可能性を持っているように、見えたのである。したがって農民起義集團にとって招安歸順は、全體として次善の策としての意味あいを持っていた。集團内部の階層性からして、その意味内容は相違するものの、全體として必ずしも不利とのみは考えにくかったものと思われるのである。しかしさらにつきつめてみれば、その集團の規模・力量を基本的に決定するのは、何としても兵力の問題であり、政權の樹立までいけるか、招安をもちかけられるか武力鎮壓という最惡の結果を招くか自體も、そこに大きくかかっている。しかも兵卒・下層農民は、いつでも消極的な逃亡をする可能性をもっているのだから、基本的には下層農民の生活追求の原理が、どれだけ集團内で實現されているかが、集團全體にとってきわめて重要な意味を持っていたと思われるのである。してみるとたとえば招安の際に領袖達の示すあれこれの忠君的言動なども、たしかにその領袖個人の忠君意識によって裏づけられており、またその個人がしばしば集團全體のその後の方向に、決定的な影響を與えてしまうことがあるけれども、より基本的には集團内部の下層民の生活追求の原理からくる、その實現への要請が、暗默の前提としてあったのであって、決してそのまま均質に集團全體に及んでいたのではない。だから領袖の忠君的言動や、招安をうけいれたか、政權をめざして花と散ったかなどによってのみ、集團全體の性格を把握するのは、必ずしも十分な根據を持たない。

そして以上のように、招安の持つ意味あいが、集團内部の階層によって相違しており、下層民の生活追求の原理の實現への要請と、それを暗默の前提とした領袖の忠君的言動や官職・地位・名譽への指向という實態は、水滸傳の内容と深くかかわっており、特に注意を喚起しておきたい。

註(4)　こうした見方は、私にはむしろ常識に屬すべきものの如くにも思われるのだが、歴史學者の研究には、その種の觀點が含まれていない。特に中國では、この時期を對象とした論文では、ほとんどが異民族侵略者に對抗するために蹶起したという見方になっている。(黄硯璠・陶希聖「北宋亡後北方的義軍」・「食貨」第三卷第五期所收。邓广銘「南宋對金斗爭中的几个問題」・「历史研究」一九六三、二期など)そこで念の爲資料を引用しておく。

いま陶宣幹という男が公用を帶びて平陽にやって來たが、その地の知府經畧使林積仁・統制官劉鋭等は、はじめから金軍と戰かう意志がなく、再三にわたり建策しても實施しようとしなかった。

某請林曰、此學士已不作守計？林曰、係殘破州郡（數ヶ月前にこの地一帶に駐留していた義勝軍が丸ごと金側に寝返って混亂の後金に占領されたことがあった。）實不可守。余曰、既如此、可於南門差官堅守。先遣出婦女老小、留壯人居城中、以省糧食。是時城中尚有七八分人……

陶宣幹はさらに數日間近隣の城市近郊をまわって千三百人程の敗殘兵を集めてきて、再び林積仁に逼った。

林云、城決不可守。余云、今日事體不同、太原已失、此陛爲帥府。屏捍一路、極力保守、以御前近。降處分甚是丁寧。今漕司與宣撫司亦自極力應副。賊馬未至、不作守計、何也！是時城中有四五分人……

危險が近づくにつれて民衆は逃亡避難し城中の住民の數は七八分〜四五分と減少していった。やがて金兵が城下に至って降服をすすめ、翌日まで回答をまってやると通告して去った。程なく林積仁も劉鋭も逃走した。陶宣幹はそれでもなお殘った下級の武官に守城を訴える。

余語之曰、三公不要走、可同共守城。余卽下城、於街巷、親率百姓上城、家至戶到呼招、非老卽少、或婦女輩。壯者悉皆逃避矣。盡率軍民、止守禦得東城兩壁、餘兩壁無人守禦。雖有登城者、亦皆乘間擦城逃壁。斬十數輩不能禦……

（以上いずれも徐夢莘「三朝北盟會編」卷五十九所引、陶宣幹「河東逢虜記」）

壯丁が先に逃避するのは、一家の中心的働らき手であるからと思われる。遁走した地方官の存在は、當時に珍しいものではない。このあと官となく民となく逃亡が續き城外では金軍がそれを襲擊するという情況になり、城はもとより陷落したのである。

(5) 平陽陷落の數日前と覺しき頃に出された詔書にいわく。

詔河北河東便宜行事

……今河北河東諸路帥臣傳檄、所部州軍各得便宜行事、合縱連橫、相爲救援、見便卽動、無拘一律。其見任官能與鄉里豪傑率衆捍敵、得守城邑、大者寵以公爵、次者授以節鉞、或登用於朝廷、世襲其地、各宜體國、奮然自效……

またいわく

詔河北河東淸野

……其餘諸路有忠義之士、能率衆勤王、或立功河北河東者、並依此……

（「三朝北盟會編」卷五十八、靖康元年十月十八日の條）

當面二つの點が注目される。卽ち一つには、軍事行動は本來中央の指揮によっておこされるたてまえが既に完全に意味をなさなくなっていた實情を追認し、現地の應變の判斷で行動せよとしたものであり、二つには、官軍のみではとても守り得ぬことを公けにし、鄉里の豪傑が衆を率いて戰うことを奬勵したものであった。この衆とは流民集團、豪傑とはその種集團の統率者にほかならない。これは流民の集團が山砦に籠るや、官許の存在となりつつあることをも示している。

(6) 時に康王のもとに附近の數州から義兵の組織かたを求める意見がとどけられていた。

……於是相人之豪俠者、日踵王府。有李秀才者、上書、盛稱南平季氏・平羅圞氏・鶴壁田氏三富族、乞召募民兵、所用器甲・所齎錢糧、乞不從官給、人人自備。……乃遣安陽縣巡尉齎酒幣以往、仍以文檄勸諭。巡尉既往、遂招三族子弟來。……李秀才者復通謁、且曰、諸人各願聚三千人、仍不煩官中贍給、各自備錢糧・器甲。每家只乞請空名補官牒三五百道……每人請空名官牒二百道去。

（「三朝北盟會編」卷六十七、靖康元年十一月十四日）

初王在相州、論郡有乞召募民兵者不已。上書轅門、往往乞空頭官牒以自圖利。相州有鶴壁村田氏・南平季氏・平羅圞氏、皆係大族。依山設險、保聚居民……聘之、既至、皆補官、又乞空頭官牒數百以往。王從之。王離相州日、無一人至。至是金人圍相州、諸族皆受木牌子、從僞矣。

（「三朝北盟會編」卷七十三、靖康元年十二月二十五日）

(7) 引用は省略するが、同前註書、卷七十、同年十一月二十七日の條を參照されたい。

(8) 同前書卷七十一、靖康元年十二月一日の條に、康王が近邊の天平山の賊衆を招安し、配下の軍に加えたという記載がある。その以前、天平山には、磁州・相州間の富族達が、天險の地を恃んで、蝟集していたが、それが賊、卽ちもと避難した流民集團にねらわれ、襲擊されたりしていた。賊辭は、ひきつづき押し寄せる他の盜賊團と衝突合體をくりかえし、力を增して、あたかも相州をうかがう風情であった。

(9) 同前書卷七十三、靖康元年十二月二十八日にかかる、呂剛中・呂時中の記事を參照されたい。

(10) 金兵が兇暴化する以前、即ちほぼ太原陷落以前の頃、河東の城市の多くは、金軍に降服し、僞官がおかれるなどして、平然と統治されていた。中には漢人官僚ぐるみ降服した例も少からずある。その際民衆が異民族統治に反對して、何らかの行動をしたなどの記載は、ほとんど見られない。

(11) これを裏づける性質の經過は、これまたおびただしい。軍隊の兵士などの例についても共通なところがある。註(3)の拙稿を參照されたい。

(12) この點中鉢氏が、第一論文で、それらが封建士大夫の傳統的倫理觀として見られる旨を指摘しているのは、注目すべきである。

(13) 當時の論爭の經過については割愛することにするが、當面參照すべき論文は、

戚立煌「中國封建社會〝农民政权〟的两重性及其向封建政权轉化的必然性」(历史研究」一九六二年第三期) である。氏はそれまでの討論で明らかになった農民政權の存在とその性格――それは起義集團の支配地域内に短期間成立していた過渡的政權のことで、程なく消滅するか、封建政權に轉化してしまうが、それでも特殊なもので、農民の利益を反映し得る性格をもっていたと解明されている――をふまえて、本來あい反する二面的性格をもっていたこと、及びそれが發展の段階によって消長することなどを論證している。私の考えではその二面的性格が、そのまま階層的區分にも對應するものだと思われるのだが、戚氏の論考がその點について不徹底なのが惜しまれる。

三

以上に、北宋から南宋にかけての當時の忠義軍や農民起義について焦點を絞って論考してきたが、そこに見られた農民の生活追求の原理や、階層による意識の相違は、もともと當時にのみかぎって存在したのではない。そのことは、多くの研究者によって指摘されるように、古代から連綿と續いている農民起義の潮流の、基本的動因が、統治階級による苛酷な搾取にあるならば、それを農民の側から見なおすと、ほかならぬ生命の防衛であり、生活の追求であることからしても明らかであろう。小論と觀點は違うけれども、それを保留しつつ前記の討論に參加した論文を再讀すれば、多くの有益な指摘を含んでおり、その中でしばしば問題にされる、起義集團の勢力の消長なども、窮極的には生活追求の原理や階層的區分による意識の相違と密接にかかわっていたのである。たとえば元末の韓林兒のごときも、その安定に向うや封建統治機構の設立を行ない、國を宋と號して、漢人の中華・民族意識を發揚する一方、地租を「凡官民田十取其二」と格段に低くして、下層農民の原理をある程度貫徹せしめたのであった。しかしその安定が限界でもあり、凋落の始まりとなって、ほどなく元朝の官兵に敗戰を重ねるようになり、急速に衰えていった。そうなると一方では部下の將軍が同志討などをするようになり、もとより中華・民族意識は空疎な口號に墮したのである。それは元朝治下でも、下層の民衆にあっては、その種の要素が、やはり從屬的・附隨的なものだったことをよく示している。それが中間的階層の意識とも密接な關連を持っていたのは、いうまでもない。

いま元曲の水滸劇をとりあげて、元曲の持つ庶民性の一端を考察するとともに、後の水滸傳との對比をも考慮して、多少の特徴を指摘しておきたいと思う。立ち入った論考は割愛せざるを得ないが、中鉢氏が指摘した異民族への敵意の稀薄なことは、より直接的には民衆の間

のその種の風潮によって規定されていたと思われる點をまずもって補足しておきたい。支配者からの壓迫は、より基本的ではあっても間接的な要素だったと解せられる。吉川幸次郎氏は、「元雜劇の研究」の中で、作者の傳記の詳密な論考をふまえて、元曲の隆盛の原因を、異民族統治下のあれこれの變革にではなく、直接的には、當時の社會的雰圍氣の中に見出しているが、民衆の風潮という點からも注目すべき見解である。氏は後日「漢宮秋」について、その異民族意識の要素は副次的なものであることを解明されたが（本誌第十七集、一九六五年）、その副次的たる所以は、社會の風潮がその種の民衆の生活追求の原理を基調とする點にあり、きびしい社會條件のなかで、なおかつ存在する所以は、かの異民族支配者が、民衆にとっては他の時代の漢民族支配者と變ることなく、當面の敵としてあったからと理解される。ところで以上はその庶民性のごく原則的な性格に過ぎないのであって、考察さるべき問題は、當面それのみではない。いくつかの具體的・特殊的な要素が、內容的にも形式的にもあると思われる。

さて、元曲水滸劇の故事內容を見るに、いくつかの類型を見てとることができる。まず不義密通譚が含まれていること（双獻功・燕青博魚・還牢末・三虎下山）、つぎに人物としての宋江は添え物的役割で故事の展開に深くは與らないこと、また英雄の落草譚が含まれることなどがそれである。小說乃至說話から元曲へという改作の際に、故事內容にどれ程の改變があったものか、なお分明にし難いが、今本の水滸傳の中のその種の類型にあてはまるとおぼしき話柄と溯及的に比較するとなおさらのこと、故事構成上のまた手法上の不齊合さが目立つように思われる。[14] それは曲辭が主で、故事が從であり、しかも故事の展開は庶民性濃厚なる白と、科のやりとりによって、多く進められるということと深くかかわっているように思われるのである。いま「双獻功」の一場面（第三折冒頭の白）を見ておく。

（孫孔目云）大人、我告着白衙內白赤交、拐了我渾家去了。望大人可憐見、與小人做主。他人妻、良人婦、拐了則這等罷了。那廝少不得車碾馬踏、該殺該剮。（白衙內云）這廝、你怎么這等罵他、假似他听的呵呢？（孫孔目云）他有偌長耳朶？（白衙內云）這廝無禮、拏枷來、上了枷、下在死囚牢里去！（孫孔目云）大人、我是原告！（白衙內云）我這衙門里、則枷原告。

（「水滸戲曲集」第一集、傅惜華等編、古典文學出版社、一九五七、上海、による。）

孫孔目：お役人樣、私は衙內の白赤交を告訴致します。（あやつめは）私の妻をかどわかしたのです。どうか憐れとおぼしめして、私のためによろしくおとりはからい願います。（奴隷ではない）他人の妻をかどわかせば、さだめしきついおしおきのはず。あいつめは、きっと車ひきか木馬のせ（？）の刑罰だ。殺されちまえ！

白衙內：こいつめ！お前はなぜそんなに彼を罵しるのか、かりにもきかれてみろ？

孫孔目：あの人はそんな長い耳を持ってますのか？

白衙內：こいつめ無禮である。枷をもて。枷をつけて死囚の牢につれていけ！

孫孔目：お役人樣、私は原告です。

白衙內：この衙門では、原告に枷をつけることになっておる。

孫孔目は女房をかどわかされたというが、その實女房は身持ちが惡く、間夫と謀って雲がくれしたのである。當の白衙內こそその間夫

で、孫孔目が訴えてくるだろうと、三日間だけ臨時に、その衙門に坐して待ちかまえていたのだった。孫孔目にとってはひどい話だが、いささか合理性を缺き、現實味に乏しい。しかしその直後に「そんな長い耳……」とは絶倒である。

高文秀はなぜそのような設定をしたのか。元曲の中にこの種の裁判を嘲笑の場にのせることは、必ずしも珍しいこととはいえないが、この場の設定は、なかでも極端な印象を與えるように思われる。大枠としては類型の中に含まれようが、作者高文秀の發案にかかる要素をもっている。[15] たとえばかねて見知りの擔當衙内に頼んで、存分な措置をとらしむべく、自分は物かげから監視するとしても、この場面の設定の主旨は、喜劇的趣向をも含めて、なお十分に生かせようものを、これではやや露骨に過ぎはせぬか。それが極端な印象を與えるのみならず、一層の明快なる荒唐性・滑稽性をもり込み得たが、反面合理性を侵しつつもたらされている。この場面の下敷きとして、裁判の場面を喜劇的に仕組むという傳統や逆轉・倒置の類型があり、それをふまえてその中に新しい工夫をとり入れた例と見えるが、立場をかえてみれば、意識的に打ち出した新味であろう。だから作者は、その合理性を類型的な設定よりも、さらに少しばかり侵したかったのだし、その結果もたらされる奇拔さや荒唐さも欲しかったものと思われる。そしてこの種の逸脱への指向は、元曲の中にかなり普遍的に存在するように思われる。

一體に元曲は庶民的といわれるが、その特色は白に於て著しいのみなず、故事内容が非日常的ではあっても市井的である傾向を持ち、その展開が庶民的感情に裏づけられていることに、よく指摘される。この場面もそうした逸脱を孕みつつ、眼の上のこぶたる胥吏が、あざけりの對象になっているのが、それである。

私がさきに中間層といったのは、元曲の作家の多くの人びとを念頭においたのであるが、それと對應すべき上層として、誇り高き漢人士人の存在を、あわせて豫想しておかねばならない。彼等は在野の私塾や書院にあって、傳統的學問にいそしみ、儒教的倫理觀の防衛に使命感を持っていた。それと比較すれば一段と庶民に近い感覺の人びとが、順應し得て、胥吏の實務にもたずさわった。主にその人びとに代表される階層の意識こそが、元曲の作者のそれではなかったかと考える。[16] だから社會の雰圍氣の中に、元曲の背景を求めるとすれば、その種の傳統的士大夫の意識を、かなりの程度に切り棄てたところにあると思われるのである。相對的に庶民性への近づきという面を持つのは、その點からしても當然であり、内容や發想の市井性への指向と表裏をなして、より普遍性のある眞實への可能性をも獲得したものとすれば、その庶民的な性格は、やはり主要な側面としていいだろう。そのことはたとえば「漢宮秋」のごとく、前代に托すなどして、異民族支配者への感情を吐露するといった、漢人士大夫の傳統的な意識に裏づけられたとおぼしき作品が少ないこととともよく對應し、元曲作家の多くが、異民族支配下に順應し得た人びとであったことを示していると思う。[17] しかしながら、その種の明るく樂天的な社會の風潮も、それがもたらされた契機には、人爲的なものがあり、漢民族の社會が内部の必然性に導かれて達成したものではなかったから、どこかにひずみを殘さざるを得ない。上層的傳統を切り棄てて順應したものの、いまだそれに替るべき新たな目標を持ち得ていなかったから、そこに何等かの不安定性や不齊合性を孕んでいたと思われるのである。作者が當時に特殊な高級胥吏でも、本來は官たるべき身が、吏の實務に就くの

は、順應はしたものの、なおかつ何がしかの苦痛として殘り、その理由をさらに深くは問わずに濟ませ得るところが、無意識的でもあり庶民性に通じるが、その痕跡を意識のどこかに留めたと見れば、その微妙な翳りが、多樣なあらわれ方をするのも、あり得ることである。田中謙二氏は「元代散曲の研究」[18]において、散曲の持つ文學性についてすぐれた解明をされ、その中でいくつかの作品が嘲謔から諷刺へと高められていたことを論證している。しかし露惡的な嘲謔のどこかなげやりな色彩が克服されても、その諷刺はむしろあまりにも辛辣で、少しく暗さを孕んでいるように感じられる。それに通ずるような要素は雜劇にも入りこんで、前引の一場面のごとく、合理性を少しく踏みにじりつつ、いささか過度に露骨な設定をさせたとすれば、作者の意識のわずかに過度な、逸脫への指向が、顏を出している場面のように思われる。また他方では、たとえば白と曲辭との現象的な懸隔も、文盲の庶民から高度の知識人までの廣範な階層の人びとが、まぎれもなく一つの歌劇を鑑賞し得るという壓倒的な風潮に、まさしく對應するものではあったが、時として故事構成をわずかに踏みにじって、故もなく歌曲を設定してはばからなかった。たとえば入牢した男に、獄吏が「殺威棒」の替りに「小曲兒」を唱えと要求したり（「還牢末」二、「普天樂」「商調集賢賓」）、あきらかに歌曲を導き出さんがための質問が主役に發せられたり（「風光好」四の錢俶や、「双獻功」一の宋江の質問）する。これらは曲が主で故事が從という精神ともかかわろうが、それにしても故事を輕視してよい意ではないのであって、こうした例はむしろ曲への安易な依存であり、遊戯的な弛緩と見える。やはりわずかな逸脫であろう。作家達は描寫すべき對象を多方面より入念に觀察するが、時として安易に類型を襲い、遊戯的弛緩を見せたり、逆に無殘なまでに露惡的に突き放したりする。それらは現象的には相反するごとく見えても、同一の發想の次元のどこかで、相通じており、結局は當時に特殊な中間層の、それとは氣づかぬにしろ殘していた士人的要素に根ざす屈折の、多方面への發散ではなかったか。そのあらわれはわずかでも、元曲の文學性における本質な要素の一つとして數えれば、作品の世界をより一層深く理解することができるように思う。

それにしても元曲の世界は、水滸のそれにくらべて、あまりにも明るく感じられる。それとともにこの物語の持つ、民衆と時の權力との鬪爭という壯大な主題や、それとかかわる重厚なリアリズムを發揮するには相應しくないように感じられるのはなぜだろう。私には樣式の違いのみならず、以上に考察したような當時の中間層の風潮の特色からくる、元曲の文學性と深くかかわるように思われるのである。屈折と發散を孕むその種の素地に、宣和遺事にも見られるような水滸說話の世界が、そのままでは展開されにくかったという事情があったと考えられる。たとえば註(14)で觸れた盧俊義の話柄と、それに相似する元曲中の故事類型との對比において、その間の近似と乖離、同質性と異質性は論究可能であるが、他日に讓る。またそれに關連して、次節で考察するこの作品の文學性の特徵と、發展の歷史との關係をより正確に把握する課題も保留しておく。

以上はこれまで研究者によって指摘されてきた元曲の庶民的性格について、それらがやや個別的で無秩序であるのを、一應整理し、當時の社會の特殊な條件と、その文學の特殊な性格との關係を考察するとともに、水滸傳と元曲水滸劇との文學性の相違を示唆せんと試みたものである。なお試論の段階にあるので、特に各位の批判と討論を強く期待したい。とりあえずは元曲の文學性をより正確に把握するため

に、當時の社會的雰圍氣を構成していた歴史的階層的情況との關連が重視さるべきことを、重ねて指摘しておきたい。

註(14)　元曲の中で、既成の故事を題材とした作品は少なからずあるが、その際の改作の手法に、ある種の共通性を見出し得る。詳細は別の機會に讓るが、いまその一端を示しておく。（なお譚正璧「話本与古劇」をも參照されたい。）

1「離魂記」と「倩女離魂」を比較するに曲では倩女の母季氏が加えられ、その希望により王擧文（卽ち原話における王宙）は科擧に應じ狀元及第するという故事が添えられている。

2「蒯蘭」（「侍兒小名錄」「南唐近事」「玉壺清話」卷四など）と「風光好」を比較するに、陶穀と錢俶がもと五代の周に同僚として仕えたことがあり、そのよしみで面目を失なった後も杭州にかくまわれ、そこに秦蒯蘭もやってきて、陶穀と二人で安樂に暮すという故事が添えられている。

3「雲溪友議」「綠窗新話」の當該部分と「兩世姻緣」を比較するに、韋皐と同鄕で荆州節度使をしている張權という人物が加えられ、玉蕭はその人のおかかえ妓女として韋皐と再會する。二人は因緣あって一眼で舊知の如くふるまい、それを知らぬ張權に無作法をとがめられるが、唐の中宗の斷で團圓することになっている。

これらを通觀するに1・3は、主人公が團圓を迎える以前の段階に、より困難な事件を設定し、それによって最後の團圓を盛りあげようとしたものであり、2は同じ目的であるが、終盤になって突然錢俶があらわれたものである。これらは大團圓强調への化工であるが、もう一つは才子をさらに才子に、佳人をさらに佳人にという極端化の傾向も見られる。そこにはしばしば安易な結合による內容上の無理も見られるが、いずれも主役により多く見事に唱わしめんとする要素ともからんでいる。水滸劇においては確證をあげることはできぬものの、これら確認可能なものにおける手法や內容的粗略さを手懸りとして檢討するに、英雄譚と密通譚とを接合することによって構成したと思われる作品が多い。それらの結果を綜合的にふまえて、今本傳の中に水滸故事と何らかのかかわりを想定可能な部分を探すと、「還牢末」・「三虎下山」と酷似する盧俊義落草譚、それとからんだ蔡福・蔡慶落草譚（ともに第61～67回）の外に、武松報仇譚（第24～27回）、楊雄・潘巧雲（第44・45回）、李逵の李鬼征伐（第43回）などを見出し得る。なお宮崎市定博士「水滸傳的傷痕—現行本成立過程の分析—」（東方學第六號、昭和28年）もあわせて參照されたい。

(15)　元雜劇中のこの種裁判の場面を喜劇的に仕立てる傳統や、その類型については、田中謙二氏編「戲曲集」（中國古典文學大系第五十二卷、平凡社）の卷末の「解說」にいきとどいた指摘紹介がある。この「双獻功」の場面は、そこに分析整理されてあるタイプとも、必ずしも合致しない。

(16)　愛宕松男敎授「元の中國支配と漢民族社會」（岩波講座世界歴史9、中世3所載）を參照されたい。なおこの論旨については、口頭でも御示唆をいただいた。

(17)　さきに本文で觸れた吉川氏の論考にもしばしば言及があるように、前期の作家には北人が多い。北人すなわち當時にいう漢人で、いわゆる南人よりは比較的優遇されていた（勝藤猛一氏「元朝初期の胥吏について」、東洋史研究第十七卷第二號、昭和三十三年九月、などを參照されたい）。まして漢人は蒙古以前に金朝の支配下に屬すること久しく、異民族の統治下にあること自體は珍らしくなかった。たとえば宋金交涉により金の領域に强制移住せしめられた燕京在住の官僚の行動などにも注目されたい（註(3)の拙稿參照）。直接には異民族に統治されることよりは別の苦痛があったと思われる。

(18)　「東方學報」（京都第四十册、昭和四十四年三月）所收。

四

さて次に現實の社會に存在していた階層的區分や、それによる意識の相違が、水滸の作品中にどのように反映されているかという視點を主軸にしながら、リアリズム文學としての文學性を解明してみることとする。

まずはじに、作品の中で階層性と內容とは、どのような關係を持っているか。從來この點に關して英雄達が抗戰派と歸順派に分類され、それと出身階層の上下がかかわっていることが、指摘されてきた。[19] その視點ははなはだ重要であり、傾聽すべきものであるが、內容的にはやや概括的にすぎ、兩極端に注目しすぎたまま、繼承されてきた。そもそも招安の件につき、水滸英雄の示す態度は、初めから截然と別れていたのではなかった。いま英雄達の招安に對する態度を通覽するに、かなり複雜な要素がからんでいる。

招安の一件につき、英雄がはっきりと反感を示す場面は第七十一回にまず見られる。宋江がその年の「菊花之會」の宴席で酒興にまかせてつくった「滿江紅」に、

中心願平虜、保民安國、日月常懸忠烈膽、風塵障卻奸邪目、望天王降詔早招安、心方足。(第七十一回、排印全傳本、以下同じ)

と唱ったのが契機になって、英雄達の反撥をかった。口火を切ったのは武松であった。

今日也要招安、明日也要招安、去冷了弟兄們的心。
今日も明日も、招安をうけたがってばかりいて、おかげでこっちは白けちまうぜ。(同前)

そこには宋江が招安を口にするのに對して、英雄達が心よからず思っていたことが窺われる。その間の事情は、宋江が九天玄女との出會い(第43回)で「忠義双全」へと路線を轉換して以來、晁蓋からの跡目相續(第60回)を經て、さらに石碣天書の誓文(第71回)と、しだいに宋江の招安歸順への必然性が高まってきたが、そのようななかで武松が怒り出したのであった。それはじっと耐えてきた不滿をついに出してしまったものと見える。それでも正面からの反對ではなくて、招安のもつ、英雄達に對する心理的影響という、附隨する側面を嫌った語とも見えて、それに續く李逵の、「招安招安招甚鳥安!」(招安だ、招安だって、何だそんなもの糞くらえ!)とまるで規矩を解さぬ無條件な反撥とは違う內容だった。李逵の言動はもとより一連のもので、今回も宋江は激怒して、早速排除させたものの、しばらくして我に返ると、武松の言が氣懸りだった。やがて武松を呼んで、

兄弟、你也是個曉事的人、我主張招安、要改却歸正、爲國家臣子。如何便冷了衆人的心?
なあ、お前だってわけのわからん人間でもあるまいに、わしが招安をうけたいというのは、惡事をやめてまともになって、お國の民になろうということなんだ。どうして皆の氣持を白けさせてしまうことになるのかね?(第七十一回)

と、こだわらざるを得なかった。しかし魯智深が、武松の肩をもつかのように、

只今滿朝文武、多是奸邪、蒙蔽聖聰、就此俺的直裰染做皁了、洗殺怎得乾淨?招安不濟事、便拜辭了、明日一個個去尋趁罷。
いまの朝廷の役人どもは、惡がしこいやつばかりで、お上をたぶらかしてばっかりいるのさ。つまりは俺のころもみたいなもんで、そめて黑くしてしまえば、いくら洗ってきれいにしたくても、で

きはせぬのさ。招安なんてだめなんだから、この際お暇をいただいて、明日からおのおの仕事さがしに、旅に出るさ。（第七十一回）

というのは、まことにリアルな觀測で、說得力を持っていた。それでも宋江は教養があるから、

衆弟兄聽說、今皇上至聖至明、只被奸臣閉塞、暫時昏昧、有日雲開見日、知我等……

まあ皆きいてくれ。今上陛下はとても立派なお方なのに、奸臣どもに邪魔されるばっかりに、仁德の光を發揮できないでおられる。そのうちきっとさえぎる雲がはれて、ありがたいおぼしめしがあらわれるから……。（第七十一回）

と說教じみたことを述べるが、はっきり言えば、あてもなくその日を待望するという見解で、魯智深への答えには、實はなっていなかったから、英雄達はひき退ったものの、腑に落ちなかった。「衆皆稱謝不已。當日飲酒、終不暢懷。席散各回本寨。」（最後まで、わだかまりが殘って）とある。以上が第七十一回に見られるあらましである。口火を切った武松、雷同した李逵、論鋒鋭く喰い下った魯智深という顏ぶれのうち、李逵はこの際人格を認められず、宋江の說得の對象ではなかった。魯智深の發言の內容は、まさに警鐘だったのに、それが宋江の糢糊たる「青史留名」の中に埋沒せしめられ、服從せざるを得なくなっていく經過を示している。

次にこれと類似の情景は第七十五回にある。宋江は招安の使者が來るときき、いそいそと歡待の準備を命ずるが、吳用をはじめ何人かの英雄が、反對乃至疑問を表明するのだった。吳用は中鉢氏も第二の論文で指摘するように朝廷との力による對決が必要で、それを經た後に、はじめて有利な招安を獲得できるという見解を示したが、それはリアリストとしての吳用の、透徹した眼力が躍如たる場面だった。宋江は例によって、「你們若如此說時、須壞了『忠義』二字」（皆そんなこというけれど、それでは忠義の金看板に泥をぬることになるよ。第75回）と陳腐な名分を持ち出すが、既に色あせて、英雄達の疑問にこたえ得る根據はどこにもなかった。それでも當時の疑うべからざる道理であったから、まともに反論はできぬものの、承服し難いという雰圍氣も濃厚だった。論點を移して、

林冲道「朝廷中貴官來時、有多少裝么、中間未必是好事」。關勝便道「詔書上必然寫着些誒嚇的言語、來驚我們」。徐寧又道「來的人必然是高太尉門下」。

林冲がいうには、「朝廷のえらいお役人がくるのなら、格好だけは整っているのでしょうが、いくらもっともらしくてもその中味がいいとはかぎりませんよ。」關勝がいうには、「詔書にはきっとおどし文句がかかれていて、我われをびっくりさせようというわけでしょう。」徐寧もまた「くるやつはきっと高太尉のてのものでしょう。」という。（第七十五回）

というように、やや附隨的なことについて、こもごも疑問を表明することになった。宋江には、そこに含まれている一面の眞理が、わからなかったのか、わかってはいけなかったのか。「你們休要疑心、且只顧安排接詔」（みんなあれこれ考えるのはやめて、まあとにかく詔書をむかえる用意をしてくれ。第75回）と塞いでしまうほかなかった。吳用の發言に助けられつつも、ここでもまた彼等が實は反對だったのに、承服させられていく場面が描かれている。しばらくは、招安不調までの大騷動の情景が續くが、なかでも阮小七の「偷御酒」には注目しておかねばならない。その場面を見るに、後にそれがどのように重大な影響

を及ぼすかについて、阮小七は何等顧慮するところもなく、頑是ない兒戯の如くにそれをやらかしたのである。その對比はかなり鮮明で、些か無分別の要素を見ないわけにはいかない。それは爽快さをともなう點も含めて、李逵の形象に通じるものである。この場の大騒動は、例の如くまず李逵が大さわぎをして、すぐ排除されたが、その際に率先して李逵を制止する者は居らず、宋江・盧俊義が自から乗り出してくることになったのは、居合せた英雄達の多くが、加勢する程ではないにしても、ある程度の共感をもって受けとめていたことを示していよう。宋江は白け切った座をとりなすべく、進んで御酒を受取って見れば、それがひどい代物だった。あらためて口火を切ったのは、今度は魯智深だった。

入娘撮鳥、忒煞是欺負人、把水酒做御酒來哄俺們喫！
この人でなしめ！下手に出ればどこまでももいい氣になりやがって、この水臭いできそこないを御酒だといって、おれ達にのませようというのか！（第七十五回）

續いて劉唐・武松・穆弘・史進等が一齊に動き出し、ついに使者は大混亂の中に身を置くこととなった。阮小七の兒戯の性格が鮮かである。

物語はやがて第二回目の招安の場面（第80回）となるが、その間朝廷との武力衝突のたびごとに、詔書にもりこまれるべき内容が、有利なものになっていく過程は、中鉢氏の第二の論文に詳しい。このたび見せた英雄達の態度は、

當時軍師吳用正聽到除宋江三字、便目視花榮道「將軍聽得麼？」卻纔讀罷詔書、花榮大叫「既不赦我哥哥、我等投降則甚？」搭上箭…
…城下衆好漢一齊叫聲「反！」

その時軍師吳用は（使者が詔書をよむのを）きいていたが「宋江のほかは」という語までくるや、すぐ花榮に目顔で合圖した。
「將軍ききましたかな。」（使者が）詔書を讀み終ったとたん、花榮は大聲で「兄貴が許されないなら、降服なんぞするものか！」とさけび、箭をつがえ……城下の英雄達が一齊に「やっちまえ！」とさけんだ。（第八十回）

吳用も腹に据えかねて、意圖的に契機をつくり出し、それに花榮が乗って手を下したのだった。この前後朝廷側の支離滅裂さが、なかんずく露わに表現され、「忠義」水滸傳と冠せしめた作者の本意なるやを疑わしめるが、なおかつそうなったのは、場面や展開を裏づけるリアリズムの精神であったろう。

第三回目では、高太尉を生け捕りにして、遮二無二招安をかちとることになってしまったが、他方で英雄達のなかに、なおも不滿が殘っていた。

高俅見了衆多好漢、一個個英雄猛烈、林冲楊志怒目而視、有機要發作之色。
高俅は、大勢の英雄達が、どれもみなものすごく强そうだし、なかでも林冲・楊志が目をいからしてこっちをにらみ、いまにも手を出しそうな氣配なのを見て……（第八十回）

以上がその種の情景のあらましであるが、物語りの場面に登場した英雄達の態度を通觀するに、これを三・四種に分類し得ると思う。

第一は、李逵・阮小七で、無分別反對派。その内容は、まことに愛すべき無分別、愚かしさ、やや滑稽な行動であり、反面大膽で極めて爽快でもある。

第二は魯智深・武松・吳用で率先反對派。

第三は林冲・關勝・徐寧・楊志・劉唐・穆弘・史進・花榮などで、不滿動搖派であり、もとより贊成などではないが、多少の教養や分別もあって、不承不承服從せざるを得なくなる人びとである。率先反對派は決して無分別ではないが、反對の氣持は第三の不滿動搖派よりも強く、率先して反對した部分である。呉用は表立つこと少ないが、そもそも贊成とか反對とかいう單純な意見發表はしていない。一應條件づき贊成とも見えるが、滿たされねばいつでも反對になる餘地を殘しているわけで、現に第二回目の招安でそれをやってのけたのであった。その見解は確固として居り、動搖など少しもない。

第四は率先歸順派の宋江と盧俊義とである。

したがって、これまでの經過は、宋江が他の多くの英雄達の反對・不安・疑問に答えることなく、うやむやなままに忠義を唱導し、口を塞がしめつつ歸順をまとめていく面と、中鉢氏の指摘するかち取っていく面とがあるが、その全體の構造は、實際に使者をやっつけたり、官軍との戰鬪などで、行動し、たたかいかちとる局面では、第一～第三グループの活躍によりながら、招安歸順の件については、第二～第四グループで、最終的にまとまっていったのだった。かくも悪辣なる歪曲を宋江に許したのは何か。本質的には忠君のもつ當時における道理や正義としての力によるものであり、宋江の形像はその象徴にしか過ぎないと考えられる。彼を悪玉とのみして片づくような、皮相な問題ではとてもない。そうなるについて、宋江・盧俊義は、招安を受けいれる人物として相對的に最も相應しかった。

こうしたグループの、その局面ごとの交替や、招安に對する色合いの差は、何を意味するか。それらは出身階層の違いとよく一致するのみならず、各階層ごとの現實における諸特徴をもよく反映した結果であると思われる。

まず第一グループの李逵・阮小七。李逵は前科者で牢番の手傳い。そのかみは何物だったのか不明（第38回）。阮小七は梁山泊のその日暮しの貧乏漁師（第15回）。いずれも當面最下層と見える。現實の社會でも、この階層はあらゆる面でいまだ主導權を持つことができない部分であった。第二グループは、やや微妙なところがあるが、武松（武行者）・魯達（魯智深）ともに佛教との關係をもち、一應信仰の經驗がある。その內容がどの程度なのかはさだかでなく、二人とも異常に強い武力を持つことから、この宗教性はつい無視されやすいが、現實の社會では宗教的な信念自體が、良心的な自覺にもとづくものであるから、實踐の上にも反映して、諸悪にたち向う姿勢は、より強いものとなりやすい。招安を諸悪の中に入れるわけにもいくまいが、納得できないことには、より強く抵抗を示すと見れば、關係なしとしない。いわゆる李卓吾の評や、また金聖歎の評文をも參照されたい。[20] 第三グループは、下級の武吏・軍官が中心である。林冲（第7回）、楊志（第12回）、花榮（第32回）、徐寧（第56回）、關勝（第63回）など、林冲はやや高級であるが、他はいずれもその種の人びとである。史進・穆弘は例外にも見えるが、日常の生活そのものが、既に義俠の世界への傾斜を強く持っており（第2・3回と第37回）、本來なら第四グループと近いはずなのが、この第三グループの階層と相似た意識をもつことになったものであろう。實際盧俊義が梁山泊の無賴をいみ嫌うのと、穆弘のあり方とはずいぶん違う。劉唐はむしろ第一に近かろうが、でき合いの無賴であり（第14回）、機轉のきく所もあって、ここに顏を出すことになったものかもしれない。三者とも發言があったわけでもなく、ともにめ立たない。この第三グループの階層は、現實には彼等は一應たつき

の道には困らないので、滿足していてよい人びとであった。しかし原則としては金も土地もなく、官權の末端に與るその一點が頼りで、相對的に官への依存度は高い。それの證據に官から離れるや、卽刻遊手惰民に轉落するか、部下ぐるみ盜賊團を組織して、首領になったりもしやすかったのである。その階層間の振幅は大きくて、また動搖もしやすかったのである。それが官・賊軍のどちらでもいいのは、さらに下層の民衆の場合で、彼等指導者達では、そう簡單でもなかった。第四グループは文の胥吏と、北京大名府の「員外」と呼ばれる地主で大商人。大小の差はあれともに恒產を持つのみならず、官權をむしろ利用する色彩を持っていた。官との關連がたとい無くとも、安定した生活を送り得るし、それに參與すれば、さらに所得が大きくなる。しかもその可能性を、實際に持っていた階層である。當面それによって最も利益を受け、無條件歸順に相應しい。

こうした現實の社會における諸階層の持つ諸特徵は、なお歷史學者の研究を待たねばならぬが、常識的な範圍で考察すれば、ほぼ以上の樣な關連を見出し得ると思う。ところで重要なのは、これらの階層的區分を反映しているということが、この作品の文學性と深くかかわっているということである。試みにその種の區分を無視した設定を、想定して見るがよい。つまり第一グループの人物が、第三・四グループの人物と同等になるには、それなりの立身出世譚や、その事態を說明し得る經過や人物の個性が必要なのであって、李逵における腕力・武力、阮小七における水練・操船・武力などがその種の要素であり、相當なよりつきではあったが、なおかつ完全に同列にはなり得なかったのである。また宋江の後の大物ぶりに較べて、「殺閻婆惜」はケチなお話しだという評價も、この點と逆向きにかかわっている。そこには階層的區分にかかわる現實性を、少しばかり無視した飛躍か手ぬきが含まれていたからと思われる。しかし全體としては、きわめて忠實に反映し得て居り、觀察の深さ、緻密さを示している。さてこそこの作品の現實性は、まことに力强いものとなったのである。

私はここで以上のような現實の階層性の反映が、いかに深刻に貫かれているかを見るために、物語の前半部に眼を轉じたいと思う。そこに語られるのは「逼上梁山」にも象徵される落草因緣譚であった。やや荒い構成のもとに、英雄達の多樣な落草の經緯が積み重ねられ、民衆が官權と對立せざるを得ぬという眞實が、うたいあげられている。それらを觀察すると、そこにもいくつかのタイプのあることがわかる。一つは「智取生辰綱」の組織的集團行動であり、もう一つは個人的なものである。そして後者をさらに林冲・楊志型と魯智深・武松型に分類できる。後者にはもう一つ徐寧・關勝型が一應あるが、それらには人爲的くさみも强く、林・楊型のやや粗略な類型と見ることもできる。

まず楊志の例を想起されたい。彼は官と賊との兩方から挾みうちに合い、まことに進退兩難の局面を經て、やむなく落草したのであった。その官權と對立せざるを得なくなるについては、責任はあげて官か賊かにあり、彼自身には一點の非もない。徹頭徹尾受身にまわりつづけ、それでも守りきれなかった（第12・13回）。その點で林冲の場合とよく似ている。林冲はかなり早い頃から、寃罪であることを主張し、仕組まれたわなと知り得る情況にあったが、それでもまことによく隱忍自重して、公正な裁判を期待するのだった。しかし最惡の妻に、心にもない離緣狀をわたす羽目になったのはまだ序ノ口で、つぎつぎと張りめぐらされた奸智のわなは、際限もなく襲いかかり、つい

に復讎してしまうのだった（第7～10回）。その經過は奸臣高俅一派の惡虐無道な策謀を、一人の男が必死の思いで躱そうとするが、成功せず、逆にじりじりと追いつめられていく情況としてあった。一點の無法も犯すまいと誠心誠意努力し、まさにその誠意のゆえにつけこまれ、陷れられ、受身にまわらざるを得なくなっていった。これらは一言でいえば受身の落草である。[22]

それに對して武松のはいささか樣子が異なる。彼はそもそも官に壓迫されたのではなかった。人も知る肉親の兄の仇うちを、いささか過分にやってのけ、自首したのである。官の裁きも公正で、孟州流配となったが、その地で世話になった施恩のために、蔣門神をこっぴどくやっつけた。そのためさらに恩州流配となったが、その措置がじつは仕組まれたものであり、そのうえ殺されようとしていると知るや、激怒して押送の役人を殺し、すぐさま孟州にもどり、鴛鴦樓で祝盃をあげている惡者どものみならず、居合せた婦女子もろとも皆殺しにしたのである（第23～31回）。武松は林冲・楊志にくらべると、はるかに自己を貫ぬいている。落草する直接の契機は、やはり官權の無道さだが、その復讎の見事さは超一流で、受身にまわった印象は強くない。林冲が無實と知りつつ、滄州への道中での虐待にも我慢を重ねるのとは大きな違いである。道理の筋を通し、やる可きことをほとんどやってのけ、その結果まともに生きていけなくなったのであった。その姿勢はむしろ高く、力強い。

魯智深の例は武松的方向をさらに強調したものと見ることができる。五台山での騷動は壓卷で、李贄評は無理としても、虛僞性への反撥という要素を認め得るし、前後の「打鎭關西」（第3回）や、「桃花村」（第5回）によって、正義の實現者、かの英雄としての文脈は、もとよりはっきりしている。「拔垂柳」（第7回）の話柄は、明快で健康な讃歌となって、誇張の言もむしろ快い。しかし「野猪林」（第8回）の一段のごときは、それがもとでお尋ね者になることからすれば（第17回）、むしろ自分からすすんで招いた官權との對立であり、救われた林冲はあまりにも幸運だった。その姿勢は天眞爛漫で、時として無鐵砲であり、隱忍自重の翳りなどは認められない。武松とともに自己を貫徹した落草というべきものである。

これらからして、前半部における受身の落草の英雄が、招安における不滿動搖派の第三グループに、また自己貫徹の落草をした英雄達が、率先反對派の第二グループに對應していることがわかる。殘りの集團的組織行動「生辰綱」は、以上の視點からして既にあきらかなように、第一と第二グループが含まれている。彼等は官權に對してむしろ攻擊的挑發的ですらあり、これまでのものとは別種である。晁蓋・吳用の一黨は、はじめから官などを馬鹿にしている風情であった。少くとも指導者グループ（晁蓋・吳用。公孫勝もか？）は、どうせ官權と自分達とは對立すべきものだから、この際ひとつ、という意識をもっており、きわめて大膽不敵で、また痛快な行動をとることとなった。彼等は決してやむなく奪取したのではない。まともに法の下で暮していけなくなるのは、その意味で當然であり、妥當な落草というべきものである。この集團の構成がさらに意味があるので、彼等はどの一人をとっても官權との關連は薄いか全くない。[23] 可能性としても官權から被害を受けこそすれ、利益を得ることはあり得ない、純粹な被支配者達であった。それは官に對しては貸しこそあれ道義的な負い目はないという連中（晁蓋・吳用・（公孫勝））と、どの道この上失なうものはないという最下層（阮氏三兄弟など）が、連携して行なったのである。前

者が主導し、後者が從屬的に共鳴した形ちである。その種の集團としてまことに相應しい。宋江・盧俊義については、もはやあらためて論及する必要はあるまい。二人は落草を最も嫌う點で共通性がある。

以上落草譚をいくつかのタイプに分けて見てきたが、それらすべてを通じて注意深く説明されるのは、官權に對する抵抗の姿勢である。しかもその人物ごとの個性はもとよりのこと、階層的特徴にもよく眼がとどいている。純粹被支配者集團は、その立場と構成にふさわしく、義の絆によってす早く團結して不敵に振舞い、林冲のような比較的高い階層の者は、それにふさわしくどこか優雅で折目も正しいのみならず、隱忍自重をかさね、武松のごとく人倫の自覺にもとづく信念を貫いた者は、良心的に自首するのであった。その多様ないきさつの一つひとつが、現實社會の必然性に裏づけられて、廣範な階層の人びとが、それぞれに筋を通しながら、それぞれの立場で生活追求の原理を發揮しようとすると、どのみち無道な官權に立ち向わざるを得ぬという主旨を形成する。だからこそ力強い説得力を持ち得たのだった。しかもその多様性は、そのまま招安完了まで整然と維持されて、ほとんど混亂することがない。招安に對して強く反對するのは、純粹被統治者集團（李逵の落草譚は獨立には存在せず、阮小七と同型）と、自己貫徹の英雄達であるし、早速に不滿動搖を示すのは、受身の落草をした英雄達である。無條件歸順派の落草譚は省略したが、彼等の落草への意欲は最も少なく、その經過の必然性もどこか足りない憾みがあった。官權との親近性からして、むしろ當然でもあったろう。

以上で明らかなように落草譚のタイプは、招安に對する態度とも對應し、全體として階層的區分のみならず、それによる意識や行動樣式の相違までを含めて反映せしめているのである。當時の作者が、階層自體やそれによる特徴の相違などについて、どの程度感得していたのだろう。全體として自覺的にそれをもり込むことは、もとよりあり得ないから、或いは部分的斷片的に認識していたにしても、なおかつ渾沌たる直感の世界に身を置いていたはずである。にもかかわらず、さだかには見えぬ潛在的な社會の法則まで、かくも精密に一貫せしめ得ているのは何ゆえか。

最後に招安完了以後の部分をもふまえて、殘してきた問題たる階層的グループの、局面による交替について考察を試みるとともに、全篇としての性格に言及しておくこととする。前引の戚氏の論文にも觸れるごとく、當時の農民起義政權は、安定期に向うや封建的政權への變質が始まり、農民の利害は反映されなくなるのだった。招安完了以後、征遼・田虎・王慶と續く展開は、やや單調さをともなった戰鬪場面が多いけれども、各種の話柄がとり込まれて、構成にも工夫がこらされている。その全體を貫く主題は、一方では奸臣の跳梁跋扈であり、英雄の側から見れば、生活追求の原理に裏づけられた、何がしかの「發財」の期待が、つぎつぎと裏切られていく過程であった。階層の交替は、その經過の歷史的な現實を、如實に示すものにほかならない。第一グループの最下層は、戰鬪の第一線でこそ最も有能である。しかしそれでも指揮權は、多くは武吏・軍官の階層の手中にあった。彼等の要求は、その武吏・軍官まで反映するのが限界で、ついに新しい正義とはなり得ず、さらに高い宋江の階層までは及ばなかったのである。やがて安定期になるや、その安定への可能性の段階から、既に埒外に排除され、ついで武吏軍官も飛び越され、主導權は上層へと移動していくのである。それこそが戚氏も指摘する變質の過程にほかならない。[24] 招安を受ければ、その主導權をもつ階層が一足飛びに朝廷の

政治の中樞に直接參與する高級官僚、卽ち姦臣にまで一擧に昇り、かたちとしてももとの默阿彌となる。その悲しむべき惡の勝利する經過こそ、招安以後の內容であった。招安をうけるについて、第三グループの英雄達は、決してすっきりと納得できたのではなかったが、その不安・疑問は、今や朝廷に對する厚き恭順と、熾烈なる期待に變るほかはない。その期待がどのように裏切られていくのか。陳橋驛では部下の兵卒を、宋江みずからの意志で斬殺させざるを得ない羽目になるが、それはまことに實質のある象徵であった。下層の者の生活が、それだけに貴重なる所得が、起義集團の安定に向うや最初に減らされ、ふみにじられていくのであった。それは當時における必然的な經過が、哀れにも貫徹する、具體的な例であり、その情景が訴える眞實はまことに重厚である。そして被害がさらにつぎの階層へと波及していくのは、その意味で時間の問題だった。その際には英雄達の不安・疑問が、そのまま期待に變り、それまでとは逆に、空しく忠君を證すために身を粉にする動因として働らくのだった。征遼の凱旋のあと、結構な御沙汰を期待して空しく待ちつづけ、路傍の酒店で聞きかじりの情報により、藁をもつかむ風情でみずから田虎征伐を申し出る光景（第90・91回）は、征遼の大功をふいにさせられたのみならず、まさにその期待・不安によって次の仕事に驅りたてられ、追いつめられていく經過としてあり、口惜しくもいたましい。正當な評價による、それなりの「發財」の期待は重ねて報いられることなく（第110回）終るのだった。宋江・盧俊義の階層は、その下の階層に乘っかって、民衆的原理とは異質で空疎なる「靑史留名」を追求するのは、分相應であり、滿足すべきかもしれない。現に宋江はそれらしき感慨をもらしたりもする（第93回一四九九頁）。また英雄達の期待が裏切られたことに對しては、「年命蹇滯」などといいわけをして、詫びてすませる（第110回一六五三頁）立場も持ち合せよう。それなりの道理の分が、彼等にあるからである。しかし腑に落ちない思いをしながら、何とか期待を滿したい、納得したいという努力そのものによって、實はさらに深い泥沼の一方的忠君にひきずり込まれ、知らぬ間に本來の意圖とますます遠のくのみならず、最後の切り札たる叛亂の發動をも、かつての團結の絆だった義によって、押えられてしまう（第110回一六五四～五五頁）人びとは、どうすればいいのだろう。かの必然的な變質は、民衆的原理の蹂躪の面をも伴いつつ、その際には下層から上層へと波及し、貫徹していく姿にほかならない。それは同時に民衆の生活の原理の限界を、具體的に示すものだった。

この作品は、前半部では民衆的原理との對比を通じて、朝廷權力に巢喰う夥しい官僚が、廣範な階層から糾彈さるべきことを語り、その理非の歸趨を、具體的に明らかにしている。後半部ではその種の官僚に必然的に籠絡されざるを得ぬ天子の姿をも表現し、それと關連する民衆側もふくめた具體的經過を通じて、その種のたたかいが、容易に終息すべからざるものであることを示したのであった。そのこと自體が、既にして透徹した觀察眼によるが、のみならず、ことがらは當時の重層的に搖れ動く社會的現實に密着し、それと相卽する重厚さと深刻さをもって描き出されており、當時の現實に潛む必然的な法則をも一貫して反映し得ている。最下層はどのように指導者たり得ぬのか、どのように參加し排除されていくか、さらにどのように指導權が上層に移っていくかを、具體的に描き出すことによって、結果として必然的に起義は失敗することを示し、對照的に最下層の主張する方向に何かがあることをも、あわせて示し得ている。かの最下層にいる愛すべ

き無法者達の躍如たる形象化の所以は、けだし根が深い。またこのように見るとき金聖歎の行なった改作は、この作品の文學性から見て必ずしも評價できない。具體的な論旨の展開は他日に讓るが、以上の考察からしても原則的な方向は、ほぼ明らかにする結果を得たことと思う。また前節との內容的な關連からして、元曲水滸劇の文學性と水滸傳のそれとの質的な相違を、より詳細にまた具體的に考察する課題についても、一つの方向づけを提示し得たかと思う。

この作品のこの文學的內容は、現實へのまことに力强い批判であるのみならず、まぎれもない歷史の豫言としての性格をも帶びている。それを果さしめたものは、現實に對する廣くかつ緻密な觀察眼であるとともに、それをねじまげることを許さない眞摯で强靱な精神であり、その現實をあくまで忠實に描きつづけたリアリズムの精神であるといえないであろうか。

註(19) 註(1)の論文、また中鉢氏の第一論文、註(3)の(3)に示した李霽氏の論文などがそれである。

(20) 容與堂百回本第四回の末尾の評文、

李和尙曰……外面模樣儘好看、佛性反無一些、如魯智深吃酒打人、無所不爲、無所不做、佛性反是完全的、……

貫華堂七十回本第三回の聖歎外書をも參照。また武松については、容與堂本第二十六回の評文、貫華堂本第二十五回の聖歎外書や本文中の評語等をも參照されたい。それぞれ「聖人」、「弟弟」（卽ち李和尙の弟）とか、「天人」、「神威」などの語をあてている。

(21) 何心「水滸研究」（古典文學出版社、一九五七、上海、一六八頁）では、西門慶と同じ階層とする。

(22) 茅盾「談〝水滸〟的人物和結構」（「水滸研究論文集」、作家出版社、一九五七年、北京所收）をも參照されたい。氏は林冲・楊志・魯智深の人物形象の相違に觸れ、魯智深だけが〝主動〟的であるとのべている。

(23) 晁蓋は保正であったが、その實質的な機能が官側なのか民衆側なのかは、はなはだ複雜な問題である。むしろ官による被害者としての性格が濃厚であったとされる。曾我部靜雄博士「宋代財政史」、第二篇第三章などを參照されたい。

(24) 註(13)で觸れた盛氏の不十分さとは、この種の交替という側面を、十分に分析し展開し得ていないことを指したのである。歷史學研究者の手にまちたい。